

第3講:「元の理」の社会思想

元初まりの話によれば、人はみな親神によって生み育てられた。その意味で、世界一列きょうだいでであると教えられる。一方で、現実に私たちが生きている社会を見ると、あちこちに格差があったり、差別の問題もあったり、争いがあったりする。社会に対する視点を「おふでさき」に求めると、「から」と「にほん」、あるいは、「高山」と「たにそこ」という区分があり、「から」や「高山」に対して批判的な言葉がしばしばみられる。「から」と「にほん」を分けるといふ趣旨のお歌も度々出てくるが、それは一見、一列きょうだいでという教えと矛盾するようにも見える。そこで、「元の理」に照らすと、社会あるいは世界はどのように理解できるのかを考えてみたい。

天理教の世界地図

西山輝夫氏は論文「元の理」にみる世界地図(『講座「元の理」の世界5』天理やまと文化会議、1993年)において、キリスト教にはキリスト教的世界地図、仏教には仏教的世界地図があるのを踏まえ、天理教的世界地図とはどのようなものかという問いを展開している。西山氏はそれを3つの段階に分けて論じている。1つ目は人間創造時点の世界、2つ目は立教時点の世界、3つ目は「めづらしたすけ」の世界(理想世界)である。

1つ目の人間創造時点の世界は非常にシンプルである。そこにあるのは、混沌とした泥海である。その中に、人間の「たね」が見出され、宿し込みの「ぢば」があった。

2つ目の世界地図では、地理的には現代世界とほぼ同じである。その中に、人間世界を再創造する最重要拠点として、大和の庄屋敷村の中山家がある。この段階の世界に住まう人間は、身体的には「成人」しているが、神の心を理解するという点では無知同然である。その人間が形成する社会には、「から」と「にほん」、「高山」と「たにそこ」という勢力関係がある。この「から」が「にほん」を、あるいは「高山」が「たにそこ」をままたしている社会状態は、神の残念立腹の対象となっている。

それでは、「にほん」が「から」をままたにする(教えが広がっていく)ようになるのが良いかという、それも完全な状態とは言えないという。理想は「神のままなり」である。世界一列の人間は「きょうだい」であるという思想が徹底され、心の澄みきりが人間としての最高の価値とされる世界である。「この方向にこれからの人間の歴史は進んでいくのが望ましい」という。

そうして、3つ目の「めづらしたすけ」の世界が立ち現れてくる。この理想的な世界を具体的に想像することは難しいが、西山氏は次のように述べている。

世界的には人種差別があります。それはなくなるでしょうか。私は黒人は黒人、白人は白人だと考えています。全部が白人にはなりません。また世界には砂漠があり、その地は非生産的な土地です。私は砂漠は珍しい助けが成就してもなくならないと考えています。……しかし、そんな条件があっても人権の尊重観念が徹底しておれば、どんな気象条件でも陽気ぐらしは人間の心次第によって可能だと思われまます。(311～312頁)

人種の違いが無くなるとか、すべての土地が肥沃になるとかということが理想の世界であるわけではない。どんな条件があっても、人権尊重の観念が徹底していれば、陽気ぐらしは心次第によって可能だ、と論じられている。

にほんから

この3段階の世界地図の議論からすると、「おふでさき」における「から」「にほん」あるいは「高山」「たにそこ」は、2つ目の世界における社会の勢力関係を表す用語である。これらの用語は「おふでさき」の号を追うにしたがって説き方が変わっていく(平野知一「にほんからについて」『天理教学研究』第16号、1967年)。

「おふでさき」前半部分、特に第2～5号においては、「にほん」と「から」を分ける(ふ2:34)、「から」が「にほん」をままたしてきたが、これからは「にほん」が「から」をままたにする(ふ3:86、87)、「から」にはまけない(ふ4:32)など、「にほん」(自分たちの側)の「から」に対する対決姿勢が鮮明に説かれている。これが、世界一列きょうだいの教えと矛盾するように見えるところである。

しかし、第10号以降はこの調子が大きく変化する。

これからハからもにほんもしらん事

ばかりゆうぞやしかときくなり(ふ10:55)

しかときけ高山にてもたにそこも

みれば月日のこどもばかりや(ふ13:26)

このように、「にほん」「から」も、「高山」「たにそこ」も、ともに親神の子供でありたすけの対象として扱われるようになる。「おふでさき」前半における「にほん」と「から」の対立は、さしあたり現実社会の勢力関係を反映し、そこに教祖を慕う人々とそれを取りまく大きな社会という意味を重ね合わせた用語だが、最終的に「元の理」に照らせば、世界一列きょうだいという教えにおいて、その対立は解消していくものとして説かれているといえる。

一列きょうだいの思想の徹底

西山氏が最後に述べている、人権尊重の観念が徹底すれば陽気ぐらしは可能だ、というのは興味深い表現である。恐らくこれは、「世界一列の人間はきょうだいである」という思想の徹底を言い換えたものである。

一列きょうだいについては、「こふき本」に「にんげんわみな神の子なり。みのうちわ神のかしものなるゆゑに、たにんとゆうわさらになし。みなきよだいななり。」(16年本榎井本、『こふきの研究』129頁)と説かれている。さらに、次のようにも言われる。

ねかうならかなへむつまじにんげんを

たがいにたすけこゝろあるなら

このこゝろかみさまよりみハけて

よろづたすけやごりやくふかく

(和歌体14年山澤本、119～120番)

人間は皆、他人ではなくきょうだいである。他人であれば、“人それぞれ”として利害が対立しない限り無関心で済ますこともできるかもしれない。しかし、「きょうだい」であるからには「互いにたすけ心」を持つようにと説かれる。これが、「元の理」に照らした人間同士の関係として大事な点である。

西山氏の言うように、「めづらしたすけ」の世界においても、恐らくは人種の違い、住む地域の違い、民族の違いなどはなくなる。それでも、この世界の中で、いかにお互いが「きょうだい」としてたすけ合いを徹底することができるか。人権の尊重もその1つの方途であるが、困難な課題である。まずは、お道につながる一人ひとりが互いにたすけを徹底できるよう努めることが肝心であろう。